

潮風の学校

後藤竜二著 高橋 透絵



潮風の学校

後藤竜二著 高橋 透絵



913.6 後藤竜二

潮風の学校

新日本出版社 1978

176 p 21.5 cm (新日本少年少女の文学 8)

どとうりゆうじ
後藤竜二

1943年北海道美唄市に生まれる。早稲田大学卒業。1966年「天使で大地はいっぱいだ」で第7回講談社児童文学新人賞佳作に入選。1970年「大地の冬のなかまたち」で第8回野間児童文芸推奨作品賞を受賞。1977年「白赤だすき小○の旗風」で第17回日本児童文学者協会賞を受賞。ほかに「地平線の五人兄弟」「算数病院事件」(新日本出版社)がある。日本児童文学者協会会員、日本子どもの本研究会会員、「燃える樹」同人。

たかはし とある
高橋 透

1939年東京に生まれる。おもな作品に「きゅうきゅうしゃのびぼうくん」(偕成社)「きょうだいきかんしゃたろうとじろう」「トマトせんせいとじどうしゃ」(ポプラ社)などがある。
児童出版美術家連盟会員。

新日本少年少女の文学 8 潮風の学校

1978年 3月30日 第1刷発行

著 者	後 藤 竜 二
画 家	高 橋 透
発行者	松 宮 龍 起

郵便番号 112 東京都文京区大塚 3-3-1

発行所 株式会社 新日本出版社

電話 東京(945) 8511 振替 東京 3-13681

印刷・壮光舎印刷 製本・古賀製本

したらおとりかえいたします。

も
く
じ



1 三日間の正月…… 5

2 凧あげ大会…… 16

3 きいろいヤツケの女の子…… 28

4 秘^ひ密^{みつ}…… 39

5 深い雪…… 56

6 雪^{ゆき}わり団^{だん}…… 70

7 英^{えい}雄^{ゆう}たち…… 82



8 学級会……………98

9 網^{あみ}はずし……………113

10 春の海……………125

11 帰^き郷^{きょう}……………138

12 大漁^{たいりく}太鼓^{だいこ}……………150

13 ニシンまつり……………160

あとがき……………173



装丁・さし絵

高橋

透



1 三日間の正月

シンと、そこ冷^ひえのする朝だった。

あったかなふとんの中で、ぼくはまだとろとろと眠^ねってた。ゴーゴー燃^もえる茶^まの間の石油^{せきゆ}ストーブの音を聞きながら、正月^{しょうげつ}ってのはサイコーだね、なんて、夢^{ゆめ}うつつにおもってた。

すると、ふいに、となりのへやで柏^{かしわ}手を打^うつ音がした。
ピンピンと、重く、よくひびく音だった。

(あ、とうさんだ)

すぐに、わかった。とうさんが、神^{かみ}棚^{だな}や仏^{ぶつ}壇^{だん}に若^{わか}水^{みづ}をくんで、「家^か内^{ない}安^{あん}全^{ぜん}」を祈^{いの}っているのだった。
茶の間からは、妹^{みわ}の美^み和^わと弟^{てい}のユ^ゆー坊^{ぼう}のふざけあう声がして、そして、たしかに、かあさんのわらい声も聞こえてきた。

(とうさんも、かあさんも、家に、いるんだ……)

あたりまえのことなのに、夢じゃないのかナと、ぼくは枕まくらもとのおみやげに、手でさわってみた。ひまわり色のトックリのセーター、しゃれたポケットのついてるGパンヂ、そして、ほしくてたまらなかったD社の半バツシュー、——きのう、大みそかの夜おそく、東京の出かせぎ先から帰ってきたばかりの、とうさんとかあさんのおみやげだった。

昆布こんぶの不漁ふりようが続いて、家でも、冬のあいだ出かせぎにいくようになってから、三年になる。三カ月ぶりに帰ってきたのに、家には三日間しかいられない。とうさんもかあさんも、四日の朝には、また東京の飯場はんばに帰ってしまうのだ。きょうもいれて、たったの三日間、それで、またワカメ漁の始まる四月まで、三カ月ものあいだグーバイなんだ。

(いけねえ！)

はつきりと、目がさめた。

バジヤマのまま、ぼくはセーターとGパンと半バツシューをだきかかえて、茶の間にとびこんだ。

「賀正がしょう！」

と、ぼくはいった。おめでとうございますなんて、テレくさくていえない。

「謹賀新年きんがしんねん！」

と、美和が台所でふりかえってわらった。

「おめでとさん」

と、かあさんもふりかえった。それで、ぼくのかっこうを見て、顔をしかめた。

ぼくはかあさんから見えない所にぱっとうつつて、

「おー、さぶいさぶい」

と、着がえをはじめた。

ストーブの正面には、羽織^{はむり}はかまで、じいちゃんが坐^{すわ}っていた。きせるで短いたばこを吸^すって、そして、じろりとぼくを見た。

ぼくは、へっちゃらだ。じいちゃんだって、とうさんたちのいないときは、ラクダのモモヒキで起きてきて、ストーブにかじりつきながら着がえるんだ。

「じいちゃん、初夢^{はつゆめ}見た？」

なんて、ちょろしいこといいながら、ぼくはパジャマをぬぎちらかして、ふかふかのセーターを、すっぽりと頭からかぶった。かぶったとたんに、――

「拓^{たく}！」

かあさんの声といっしょに足音がして、ボタンとおしりをひっぱたかれた。三カ月ぶりのボタンだった。かあさんの力は、ちっともナマっていない。

「わあい、おこられぞめエ」

かあさんのいくところに、くっついてあるてる美和とユ一坊が、はやしたてた。

「お正月さんだってゆうのに。ちゃんと自分のへやで着がえといで」

と、かあさんはいった。ちよっぴりおけしをしたかあさんの顔は、なんだかまぶしい。

ぼくはトックリのセーターからぬうつと首をつきだして、へっへえとわらった。

「ほら、おにいちゃんを見ならいな」

かあさんはまたボタンとやって、まっすぐに窓の外を指さした。

つらのさがった窓からは、鉛色の空と海が見えた。木もなく、高い建物もなく、ただ、だだっ広

い雪の浜に、地吹雪がうずを巻いていた。

地吹雪の中に、黒く、ふたつ、人影が見えた。

とうさんと、おにいちゃんだった。

肩をならべて、ローソク岩の弁天さまを、拜んでいるのだった。

ローソク岩は、海のまんなかによきりとつき出た岩だった。そこにまつてある弁天さまに、とうさんとおにいちやんが、なにを祈ったのか、そんなこと、ぼくの知ったことじゃないけど、

(ちえっ、ひとり、いいカッコしちやってさア)

と、ぼくはカッときた。

弟をだしぬくなんて、許せない。

茶の間ですっかり身じたくをして、外に出た。

(うらぎり者には、天罰が下るのだ)

昆布を乾燥させる小屋のかげにかくれて、ぼくはおにいちやんを待ちぶせした。かたくにぎった雪

玉をふたつ持って、たたきつけるように吹く潮風にふるえながら、待っていた。

とうさんとおにいちやんは、なにか話しながらもどってくる。中学校の帽子をかぶったおにいちやんは、おとなぶって、やたらにうなずいてばかりいる。

(早くこい、ニャロー)

しばれた雪道をふむ足音が、キュッキュツと近づいてきた。

十、九、八、七と、ぼくは秒読みをした、六、五、四、三、二、一！ ぱっとふたりの前にとびだ



した。距離は、わずか五メートル——。

「悪漢、かくご！」

雪の玉を、おにちゃんめがけて、力いっぱい投げつけた。コントロールには自信があった。悪漢は、一発でころりとマイるはずだった。それなのに、新品の半バツシユーのやつが、つるんとはばれあがった道ですべてしまった。顔が赤くなるほどリキんでたぼくは、てかてかの雪道にぺたんとはいつくばって、つぶれたような声をあげた。うなりをあげて飛んでいくはずの雪の玉は、三メートルも飛ばないで、かた雪の上でくしゃんとくだけてしまった。

「こら、拓、元日そうそう、なに、ふざけてるんだ」

と、とうさんがいった。そして、ひざを打って立てずにいるぼくを、あっけないほどかんとんに、ひよこんと引きあげて立たせた。

「おまえも、今年は六年生だべ」

とうさんは、腕のなかにぼくの頭をかかえこんだ。

「しっかり、やれよ」

一年坊主にするみたいに、こんどは、ぶあついてのひらで、頭をゆさぶった。

おにいちやんが、となりでにやにやわらつてゐる。

しゃくだから、ひょろんと長いスネをけとばしてやろうとおもつたけど、またすべてしまいそうなので、ぐつとこらえた。

「頭がないと、ダメな時代なんだからな」

と、とうさんはいった。

「まじめで働き者だっちゅうだけじゃ、ダメな世のなかなんだからな」

いやにしんみりした声だった。

出かせぎにいくようになってからの、口ぐせだった。

茶の間にもどって、みんな「おめでとうさん」をいつてからも、とうさんは続けた、――

「海にあるものを獲るだけの漁師じゃダメなんだ。たがいに押しのけあつて、早いもの勝ちの漁を続けてきたから、だから、百二十トン級の船でテグリ（底引き網）やられても、ヘンだともおもわなくなるんだ。ニシンが群来んようになったのも、タコがやれんようになったのも、スケソウやホッケもよ、みんなテグリの乱獲のせいなんだ。育てもせずに、海底かっさらえば、獲れなくなるのはあたりまえだよ」

おとそを飲んで、お正月のごちそうをつつきながらも、とうさんはじいちゃんを相手に、そんな話をした。

「B村の漁師たち見れ。な、テグリば追い出して、タコ漁成功させて、十年計画で漁業基地作ってゆんだからな。夢でなくて、もう取りかかってるんだからな。——頭ないばダメなんだ。十年先、二十年先見通せるだけの、頭ないばダメなんだ」

「シだ。ニシンきたころは、よかった」

じいちゃんは、もう酔っぱらって、とんちんかんなあいづちをうった。

ぼくらはつきあってくすくすわらったけど、

「ン、ニシンの群来る浜にしないばダメなんだ。やればできるんだ。現に、あちこちの浜でやってるんだからな」

とうさんは真剣な顔で、ぼくらをぐるりと見まわした。

「どうだ、漁師やるもんはいるか？ だれがおれのあとをつぐ？」

「……」

ぼくとおにいちゃんは、ちらっと顔を見あわせた。ぼくはへへえとわらったけど、おにいちゃんは、



くそまじめな顔で、コチンコチンになってる。ちえっ。

「出かせぎしなきゃならんような漁師りようしに、だれがなるって、ねえ」

と、かあさんが助け舟がねを出してくれた。

「——そうか、まあ、見てれ」

と、とうさんはいった。そして、また育てる漁業ぎょぎょうの話はなしをひとくさり演説えんぜつした。とうさんの演説は、出かせぎから帰るごとに、理屈りくつっぽくなるみたいだった。

ぼくらはもう苦しくなるほど食べてたけど、立ちあがるわけにもいかず、とうさんをちらちら見ながら、そわそわしていた。

でも、とうさんはちっとも気づかない。

「えー、とうさん」

と、ぼくはおもいきっていいかけたけど、やっぱりズバリとはいえなくて、

「いい正月だね」

なんて、ごまかしてしまった。

「とうさん、みんなにあげるものがあるでしょや」